

# フィヒテとカントの空間論

——『1801/02年の知識学の叙述』を中心に——

浜田 郷史

本研究では、カントの空間論とフィヒテの空間論を、コペルニクスの転回として知られるカント以来の思想潮流に置きつつ比較する。この目的のために、カントの『純粹理性批判』(以下『純理』)、フィヒテの『1801/02年の知識学の叙述』(以下『1801/02年』)を主要なテキストとして用いる<sup>1</sup>。

## コペルニクスの思考法としてのカント哲学

「コペルニクスの転回」として知られているカントの思考法は、従来の思考法の変革を迫るものだった。コペルニクスが主張したのは、天体の運動は観測者の位置している地球の運動の投影(像)にほかならないということである。カントも言うように、このことはもちろん「日常の感覚に反している widersinnisch」(BXXII, Anm. 4)。だが、地動説の思考法を貫徹すれば、それが地上に住む人が持っている世界観について何ら変更を迫るものではないこともわかる。すなわち、地動説は地上に立つ者にとっては天が動き大地は止まって感じられるという事実を説明する。そして、そのように従来の主張を事実のレベルで認めつつ、その事実を素朴に信念体系の中に取り入れる独断論を否定する。地動説は、主観と対象との正しい関係を設定し直す過程を通じて、独断を自覚し、自己を正確に認識することを教える。コペルニクスの地動説こそは「批判哲学」の祖型なのである。

後の議論を簡略化するために地動説の理論構造を見ておきたい。地動説はA：太陽から見れば地球は動いているという主張とB：地球から見れば太陽が動いているという二つの主張からなる。

AであることはBの条件であるとともに、BであることがAの条件である。だがAはBに格別な意味において優先する。Aは根拠付けの知、実在を説明する知である<sup>2</sup>。

カントは事実(B)と事実を説明する知(A)を区別し、そうすることで蓋然的観念論(懐疑論)を排している。主観から独立した実在(経験的実在性)を確保しながら、それが認識の超越論的な条件に従うものとした(超越論的観念性)のである。以下に述べるように、フィヒテの空間論もまた

<sup>1</sup> カントの引用は注記ない限り『純粹理性批判』であり、慣例に従って第一版をA、第二版をBと略述した。その他カントの著作についても、アカデミー版の巻数・ページ数を付した。フィヒテの引用は注記ない限り『1801/02年の知識学の叙述』であり、慣例に従ってアカデミー版の巻数・頁数を付した。また著者による引用と本文の強調は傍点で示す。著者の補足は[ ]で表し、…は省略を表す。

<sup>2</sup> 実際の地動説と天動説のどちらが正しいのかは決定困難である。ここでは根拠付けという関係だけを問題として、詳細には立ち入らない。

このようなコペルニクスの転回の思考法を支持するものである。

では、そもそもカントやフィヒテはどのようなものをB, すなわち説明されるべき実在として捉えていたのか。言うまでもなくカントによる空間概念の超越論的解明は客観的実在性を伴う幾何学的認識の可能性を説明する。彼はその解明の後に述べている。「私たちの説明だけがアプリアリな総合的認識としての幾何学の可能性を概念把握せしめる」(B41)。

しかし、この空間に対しカントは次のようにも述べる。

現在の世界は私たちに対して、多様性、秩序、合目的性および美に関して計り知れない光景を提示しており、人がこうしたものを空間の無限において、またはその無際限な分割において追求しようとするならば、…全体についての私たちの判断が言語を失い、それだけに雄弁な驚愕の中に溶解auflösenしていくに違いない。(A622/B650)

人が「驚愕」のうちに自然を眺めるとき、「多様性、秩序、合目的性および美」は無限小に偏在し無限大に広がる「空間の無限」のうちに認められる。ここでカントが述べているような空間は、かつてブルーノが唱え、パスカルが「永遠の沈黙は私を恐怖させる」と言わしめた、中心を持たない(或いは中心がどこにでもある)無限の宇宙空間と同じものと言って差し支えない。

かかる無限の空間は自然科学の考察対象となってその発展の原動力となったというよりも、むしろ中世のアリストテレス＝スコラ的な世界観・人間観を問いただすという意味で革命的なものであった。ブルーノやパスカル以前の中世の人々にとって「…宇宙の光景はいかに雄大であろうとも、想像力にとって全く面くらってしまうようなものではなかった。十五世紀の人は城壁で囲まれた町に住んだように、まだ城壁で囲まれた宇宙に住んでいた」<sup>3</sup>。その代わりにブルーノは“ここ”以外の場所にもたくさんの知的な生命が住んでいる無限に有機的な宇宙を見、パスカルは“ここ”以外の場所には誰ひとり知的生物はおらず、一切の目的もなく進行する無意味で無機的な宇宙を見ていた。

私は本稿でこうした空間を議論したいと考えているが、これに対しては次のような見解が出されるかもしれない。カントの課題は幾何学的認識を可能にする空間を説明することであって、一切の判断を超出するがごとき空間は問題外である、ましてやこの両者がどのように関連するかを論じることはなおさら無理がある、と。

『純理』の空間概念に対する考察は「超越論的感性論」章に集中しているが、確かに、この章において、ブルーノ・パスカルの意味を持つ無限の空間は顧みられていない。しかし、コペルニクスの転回を踏まえれば、そのことはむしろ当然ではないだろうか。この章は、空間を独断的に眺める立場からは記述されないのである。

だが、後述するように、カントのプロジェクトがコペルニクス的である限り、それは独断論を除去しても事実を除去することはない。空間を前にして私たちの判断が雲散霧消することが事実でなかったら、次のような言葉は何を意味するのだろうか。「繰り返し、絶え間なく熟考すればするほど、常に新たに、そして高まる感嘆と畏敬をもって心を満たす二つの物がある。私の上の星空

<sup>3</sup> Lovejoy, o. Arthur. 1957: The Great Chain Of Being, (=『存在の大いなる連鎖』、晶文全書、内藤健二訳、1975年) Harvard University Press, S.101. (邦訳106頁)

と私の内の道徳法則とである」(『実践理性批判』V161)。星空は私の判断の対象ではなく、むしろその限界を示す。また若い頃カントは宇宙人の実在を論じてもいる(『天界の一般自然史と理論』I349ff)。カントは、ブルーノやパスカルと同じく、中心を持たず無限に広がる空間に衝撃を受けた一人なのではないか。

空間が単なる主観の形式でありながら、同時に恐るべきものとして迫ってくるという事実、そしてそれはいかにして可能なのかという問いは、カントからフィヒテにも継承されている。

空間は、無限へと分割可能であるはずだ。…空間は、まずいったいどのようにして内的な堅固さを持つに至るのか。つまり、自己自身のうちで崩れ落ち、霧の中へと薄まり、消えてしまうということがないものになるのか。空間は、そのように考えてみると、たとえ無限に分割可能であっても、存在することができるためには、…分割可能ではないのである。(GA II/6, 231)

フィヒテは、カントが「判断が…溶解する」と述べた事態をむしろ空間そのものの消失として捉えている。「自己自身のうちで崩れ落ち、霧の中へと薄まり、消えてしまう」といった事態である。

もちろん、引用後半で言われるように、フィヒテはそのような事実が——動かしがたい事実であるとともに——誤りであるとも述べる。哲学者ないし知識学者は、カントが感性論で行ったようにコペルニクス的立場に立つ。そこから見れば、一面的でしかない事実をもって真理と見なすのは誤りである。実際、カントやフィヒテが空間に与えている他の要素——幾何学的な作図可能性——は、自己自身の中に消えていく空間ではなく、「堅固なもの」、すなわち哲学者が見いだした確固とした基礎の上に築かれる。基礎付けが首尾よく為されるためには、空間は「堅固なもの」とみなされなければならない以上、もはや驚愕のうちに自己を失うものではない。

では、カントの空間論において、空間のコペルニクス的基礎づけ、事実の説明、そして基礎から新たに説明される幾何学的作図可能性は、どのように区別され、また関連するのだろうか。以上を検討してから、フィヒテの空間論との比較を試みよう。

## カントの空間論

### 1 現象の導入

『純理』『感性論』の冒頭後半部では、「物体の表象」が例として挙げられている。

だから、私が一つの物体の表象から、悟性がそれについて思考するところのもの、すなわち実体、力、分割可能性等、また、感覚に属するもの、すなわち不可入性、硬さ、色などを分離しても、この経験的直観から私にはなお何らかのもの、すなわち延長と形態が残る。これらは純粹直観に属し、アプリオリに、感官の現実的対象なしでも、心の中に感性の単なる形式として、生じるのである。(A20-21/B35)

この引用でカントは物体の延長や形態が「純粹直観」に数えられると述べる。それらは物体の一次性質や実体ではなく、「単なる形式」として、感覚がなくても「心の中に…生じる」。

カントの主張は次のように考えることで理解される。カントの先行者は基本的に立体や図形や線(延長や形態)を現象として考えていない。すなわち、空間的な物を、それがどのように現れるのかとは独立に存在するものとして扱うのである。例えば「立方体」を「六つの正方形に囲まれた立体」として定義し、正方形を「四つの角がすべて等しく四つの辺がすべて等しい四角形」と定義する。しかしもし実際に立方体の形をした物体を手のひらに乗せて眺めるならば、その或る面はひし形に見えるだろう。この定義はそうした「現象」を考慮しないのである。

これに対してカントは物がどのように現れるのかを問題とする。対象を或る観点から見ると、または対象に或る観点から光を照射するとき、その延長・形態は常にそれに応じて変化していく。生じているのは、正方形が特定の位置から見るとひし形に見えるという関係である。仮象(例えば縄が蛇に見えた等)と異なり、正方形は特定の位置からはひし形に見えなくてはならない。

正方形として見られているのはひし形である。この関係性がそのようなものである限りにおいて、私たちは正方形という形象を眺めることはできない。正方形は特定の観点からの眺めを絶したイデア的存在である。だがそれにも関わらず、私たちは実際に正方形の認識に到達できている。特定の観点からの眺めを絶した正方形が特定の観点から眺められているのである。

## 2 形式としての空間の先行性

空間的对象についてカントが行っている理解は、何らかの観点を無視して延長や形態の認識を得ることは不可能であるというものである。この理解を持つとき、この延長や形態は見かけ・仮象に過ぎない(=本来の形態・延長は別にある)という主張は無効となる。はじめから観点を超出した形態や延長があって、それが空間にいわば入ってくるのではない。むしろ延長や形態はその都度の観点を離れては無である。この観点を「私」と読み替えれば、対象は必ず「私の外部」に立つものとして私と絶えず相関する。

以上から次の引用が理解される。

空間は、外的経験から抽象されるいかなる経験的概念でもない。というのも、何らかの諸感覚が何らかの私の外部*etwas außer mir*にあるものと関係づけられるためには、つまり、私が自らを見出す[空間の]場とは別の空間の場にあるものと関係づけられるためには、また同様に、私がそうした諸感覚を互いに外的で併存しているとして、すなわち単に種々異なっているのではなくて、種々異なった場において表象することができるためには、空間という表象がすでに根底にあるのでなければならない。(A23/B39)

形態・延長を持った物体が「私の外部」という性格を持つということと、「私が自らを見出す」ということは、カントにおいては一つのこととして捉えられている。つまり、私が自らを見出すような場所(以下、簡単のために「ここ」と表記する)及びここではない場所は空間の中で初めて開かれる。

私自身がなければ私の外もない。ここでカントが語っているのはそのようなことだ。しかしその強調点は「私」そのものにあるのではない。またそれは、単なる言葉の意味上の要請でもない。根底にあるのは「空間」である。この箇所は、空間こそが表象の表象性の原理となっていることを示している。

とはいえ、カント自身が後年「観念論論駁」を書き、外的世界そのものが「私の現存在」を中心と



した表象に過ぎないのではないか、という懸念に答えざるを得なかったように、カントにとってこの間の事情は常にはっきりと捉えられているわけではなかったし、それはカント解釈者にとっても同様であった。

一方フィヒテは、表象という有り様(知の有り様)を第一部で「閉じた眼」(GA II/6, 167ff.)と呼び、問題視している<sup>4</sup>。表象を成り立たせる条件は量化作用——表象に没入している眼——の外部に問われなければならない。この外部とは、「私の外部」ではなく、私と対象との相関関係(「或るもの」を「私の外部にあるもの」と言いうる事態)そのものを成立させるという意味で、その相関関係の「外」にある条件である。フィヒテにとっても、空間とはまさにそのような条件であり、(閉じた)眼の前に表象世界が成立する以前に用意されているものである。

「空間という表象がすでに根底にあるのでなければならない」というカントの表現もまた、私と対象との相関関係が、切り詰めれば私の表象作用に全て還元される(閉じる)事態を示している。延長や形態は向こうに見えたとしても、それらは「心の中に生じる」。そして、ここでは私と私の外部、こことそこの関係そのものが表象(純粹直観)として、超越論的に反省されるのである。このように直観が表象であるためには、直観の形式があらかじめなければならない、という構造がある。しかしまさにこの構造が経験の只中では——「私」が「或るもの」を「私の外部」として見なす際には——決定的に見失われるのである。

個としての(感覚する)私によって対象と感覚が現実的に関係づけられるという事態、すなわち、私の表象が成立する(=スクリーンとしての知覚空間に絵が映る)という事態の前に、すでに空間がある<sup>5</sup>。後に述べるように、経験の只中に見出される空間(私と相関する対象世界)と、この超越論的に考察される限りでの空間(前対象的な空間)とをフィヒテも区別しているが、次節では、カントの空間論にそうした2つの異なったモチーフがあることをより詳しく示す。

### 3 二つの空間概念

前節で述べたように、延長や形態は常に「ここ」という観点に依存的なあり方をしている。とすれば、そうした形態が置かれている空間そのものも観点依存的であると見なすべきではないか。このような観点と対象との相関関係として、カントの空間は「私」を中心とした観点依存的な空間、その意味で生きた空間であると解釈されることもある<sup>6</sup>。

しかし、こうした解釈には次の問題点がある。第一に、観点依存的な延長や形態は「純粹直観」(ないしは「単なる形式」)と呼ばれるが、空間については「純粹形式」とも呼ばれている。物体の表象(認識)から分離される「純粹直観」と、対象なしに思考される「純粹形式」<sup>7</sup>を同一視してよいか

<sup>4</sup> フィヒテの「閉じた眼」については以下の論考が参考になる。美濃部仁(2016)「実在性の拠り所としての良心と良心を超える立場—1800年前後のフィヒテ—」、『理想』(697)所収、理想社、55-67頁。

<sup>5</sup> カントの問題が「ここ」ではなく空間そのものであることを明示した先行研究として、田山怜史(2011)「射影幾何学とカント空間」仏教学部論集95、1-16頁、および植村恒一郎(1980)「カントの空間論」『理想』(564)所収、理想社、141-156頁)。

<sup>6</sup> 久保元彦(1987)「形式としての空間 「超越論的感性論」第二節、第一および第二論証の検討」(『カント研究』、創文社所収)の理解が例えばそれである。

<sup>7</sup> 「人は空間が存在しないという表象を作ることはいくつかできない。だが空間の中でいかなる対象も見出されないということはきわめてよく考えられる。空間は諸現象の可能の制約と…みなされる」(A23-24/B38-39)。

には、検討の余地が残る。

第二に、カントは方法論や分析論において「線を描くこと」を論じ、概念の構成＝作図可能性としての直観を論じている<sup>8</sup>。つまり、延長や形態は「構成」されうるものである。しかし、空間は「与えられた無限の量」(A24, B39)としては、形式であって決して主観の能作によって構成されるものではない。

以上から、カント空間については少なくとも二つの意味を区別すべきである。そのことと、次に引用するカントの「形式的直観」と「直観の単なる形式」の区別は、対応していると考えられる。

空間は、対象として表象される場合(現実には幾何学において用いられるような場合)は、直観の単なる形式以上のものを含んでいる、つまり、感性の形式に従って多様を一つの直観的な表象にまで総括することを含んでいるのであり、従って、直観の形式は単に多様を与えるが、形式的直観は表象の統一を与えるのである。…この直観の統一は…悟性の概念には属さない。(B160)

この箇所ではカントは、幾何学の対象としての空間を「形式的直観」と呼び、直観の形式とは区別している。「形式的直観」は「統一」を与える。ただし、この統一は必ずしも概念レベルのものではない<sup>9</sup>。先に述べた例において、物体の表象が延長や形態を獲得することと、私が「ここ」から眺めることは、相即した事態であった。そのようにして「形式的直観」を私を中心とした空間——延長や形態がそこで与えられるような限定的空間として理解することができる。そこにおける「統一」は、私を中心とした一種の座標系として考えられる。例えば、立方体の一面が特定のこの形——例えばひし形——に見えるのは、特定のこの座標系においてであろう。

これに対して、純粹形式としての空間は「直観の形式」に対応し、「単に多様を与える」とされる。しかし、この引用箇所ではカントはこの意味での空間をそれ以上詳述していない。この意味での空間が論じられるのは「弁証論」である。節を改めて考察する。

#### 4 無限としての空間

形式的直観の統一と単なる直観の形式の最も重要な差異は、後者即ち純粹形式としての空間は与えられた無限の量として一つの全体をなしているということである。それはそれ自体が経験の対象とはならないものの、可能な空間量に対して常に前提となっている。

対して、1フィートや1マイルという空間量は、連続量ではあるが悟性によって統一され対象

<sup>8</sup> Freedman1992は、カントのいう構成を概念構成と見なしたうえで、ユークリッド幾何学における作図と同一視した。カントは当時の論理学の不備から、例示や現示といった論理的操作の代わりに直観に求める必要があったのである。Friedman, M. 1992: *Kant and the Exact Sciences*, Cambridge: Harvard University Press.

<sup>9</sup> この箇所は、悟性と感性の棲み分け問題を惹起し、非概念主義を主唱しているHanna、概念主義を主唱するMcDowellを筆頭に現代に至るまで議論がある。非概念主義をめぐる論争については、例えば中野裕考(2017)「概念主義論争とカントの知覚論」、人文科学研究 No.14, 99-107頁を参照されたい。中野論文も注目しているように、知覚の非概念的な性格について考察する場合、自我中心的な空間概念に求めるか、それとも感性の形式に求めるかという二つの方向が見られる。これは本発表の二つの空間概念に対応している。

化された延長である。そうした延長は、常に図形や線といった定量(quantum)としての空間量としてのみ認識される(A169/B211)。認識の対象となる空間は、ある定量を単位(=統一された量)と見た時、それと比較された相対的な量に過ぎない。「空間は諸空間からなる」(A169/B211)と言われるのは、どの空間もそうした単位から測っていくことが可能だという意味である。

しかし「弁証論」で空間は「全体totum」と言われる。「というのも空間の諸部分は、ただ全体においてのみ可能であり、全体が諸部分によって可能なのではないからである」(A438/B466)。この意味において空間は相対的な量から構成されることはできない。感性論での「与えられた無限の量」(A24, B39)という表現、図式論で「外的感官に対するあらゆる定量quantumの純粹形象は空間である」(A142/B181)という表現も、その都度の構成において前提される、それ自体は構成されない量という意味である。

無限性の正しい(超越論的)概念は、定量quantumを測り尽くすことにおいて、統一[単位]の継起的総合が決して完了し得ない、ということである。(B460)

空間を測り尽くす試みは、単位としての延長や形象をいくら加算しても完了しない。加算するという手続きにおいて、無限として空間は考えられる。

一般的に、カントは無限の大きさを持った一なる空間を単なる理念とし、理性の「構成的使用」を避ける。だがここには、実無限をも否定し得ないカントがいるとも考えられる。なぜなら、佐藤2001が主張するように、可能無限すら測り尽くしえない以上、比量的理性の技術者たる哲学者も実無限を否定することはないはずだからである<sup>10</sup>。

「弁証論」でカントが批判するのは実無限を独断的に仮定することである。しかし、空間が測り尽くせないという経験は、独断論(実無限としての空間の肯定または否定)にかかわらず、驚愕や恐怖といった反応を引き起こすだろう。空間はその都度の作図(構成)に先立ち、また量の規定を超えている。

## 5 空間は私の現存在に先立つ

幾何学的構成ないし経験的な量の測定から抜け落ちる空間が、形式として当の認識を基礎づける。幾何学者が扱うような対象化された空間や、限定された個々の事物の形態・延長は、哲学的には主観の観点に依存的な存在と言いうる。しかし形式としての空間は、totumという性質を持ち、対象的に捉えられない。

空間は外的対象と私との関係を可能にするとともに、観点依存的なあらゆる「表象」の根底にある形式でもある。確かにカントは、「私」を中心とした観点依存的空間を見出しているが、のみならず、そうした「私」をも含めて無限の空間のなかに置かれているからこそ、その観点に応じて表象が立ち現れる。空間は主観の形式であり、主観的に構成されたものではない。空間は「私」や「ここ」の特権性を超えている。

以上に述べてきたカント空間論からの成果を、フィヒテは見据えていたのか。また、そうだと

<sup>10</sup> 佐藤恒徳(2001)「カントにおける三つの無限概念—第一アンチノミー「定立に対する注解」を軸として—」思索(東北大学哲学研究会)第34号、21-39頁。

すれば、どのように取り入れているだろうか。フィヒテ研究者のWoodは、カントとフィヒテの空間論を比較する際に、感性論の形式としての空間、および分析論における「線を描くこと」を論じたうえで、カントが依然として与えられたユークリッド空間を問題にしていると結論している<sup>11</sup>。しかし、こうした捉え方は、第一にカントがユークリッド的な「どこからも見られていない立方体」を排し、観点依存的な空間——平行線の公理を満たさない——を提示していることから、正しくない。第二に、カントは形式としての空間を観点依存的な空間から区別しようとしている。この点もWoodは見逃している。

後述するように、フィヒテはこの二つのうち、形式としての空間を第一義的に空間と呼んでいる。そこで以下簡略のために、観点依存的な空間については「場」、非依存的な空間について「空間」と呼ぶことにする。

カントの議論を締めくくるに当たり、後者の意味における「空間」を際立たせる特徴を大まかに三つ指摘しておきたい。

- ① 空間の先行性。世界のその都度の現れ方は、「ここ」=観点そのものに依拠しているのではなくて、むしろ「ここ」自体が、すでに成立している空間(与えられた無限)において可能とされている。例えば、ひし形を立方体の現れとして私たちが把握できるのは、その観点が空間の中で位置づけられていることによる。ひし形は可能な「見え方」の一つであり、その可能性は立方体と私の位置関係において一義的に決定される。すなわち、私が現実にはひし形を見るときでも、それは、空間の中であらかじめ形成されている「可能性」を露わにしたに過ぎない。
- ② 空間の一性。「ここ」は、空間の数ある「可能性」という点では、他の無数の場所と同じである。私はその都度「ここ」を中心に物を見るが、決して「ここ」が空間の中心ではない。
- ③ 空間の無限性。空間が絶対的な中心を持たないなら、私の占める「ここ」という位置を、空間の何らかの中心を原点として再度絶対的に置き直すというようなこともできない。したがって空間における私の位置は決定不能である。

幾何学者が対象化する空間に対しては「どこにあるか」「どのようにあるか」「どれほどあるか」を確実に計測可能であるが、形式としての空間にはそうした計測が確実に不可能である。幾何学の基礎付けという課題を一旦脇においた場合、形式としての空間はこうした先行性・一性・無限性を示しつつ、私の特異性・特権性を解体するものである。「誰が私をここに置いたのか?」(『パンセ』205節)というパスカルの言葉はそうように解釈されうる。

## フィヒテの空間論

フィヒテはこうしたカント空間について、後述するような彼自身の空間論を展開した後で次のように述べている。

<sup>11</sup> Wood, David W. 2012: *"Mathesis of the Mind": A Study of Fichte's Wissenschaftslehre and Geometry (Fichtestudien, Supplementa)*, Editions Rodopi B.V., S. 220.



上述の[=フィヒテ自身の]空間の導出と記述は哲学、自然論、そしてあらゆる学にとって決定的である。最後に述べた構成されかつ構成可能な空間 *der construierte u. construibare Raum* とは、それ自体としては決して可能ではなく、無へと溶融するものであるが、これを人はカント以来唯一の空間であると見なしてきた。…一貫して追求すればこのことは形式的観念論に導くに違いないだろう。けれどもこれを嫌って人は、こうして台無しにされている空間に[改めて]質料を挿入することを自らに許している。人はこの挿入を自らに許しうるならば、すでに更なる一切の付加なくとも空間は一緒についてくるということも考えなかったし、また内的な堅固さ(これが悪評高い素材、ないしは質料の基礎なのだが)を持たない空間は無限分割可能性=無へと消え失せる、ということも考えなかったのだ。(GA II/6, 233)

ここでフィヒテは、カントが見出した「空間」が「堅固さ」を持たず「無へと消え失せる」と述べている。フィヒテによれば、カントの空間は「構成されかつ構成可能」なもの、単なる主観的な構成物である。カントの後継者たちは主観的に構成された物に過ぎないとされた空間を嫌い、客観性の絶対根拠を空間の外部にある「質料」に求める。カントは事態を「一貫して追求」し、形式的観念論に向かっている。

フィヒテの見立てと異なり、私たちはカント空間を主観的に構成された物ではなく、むしろその都度の構成の成立する座標系「ここ」に先立つものとして考察してきた。カントの後継者はともかくとして、カントの空間は必ずしもフィヒテ空間と大きく異ならないのではないかと考えられる。

しかしむしろフィヒテのポイントは、それ自体として可能ではないとされる主観的な構成物が「無へと消え失せる」と言われなければならないという点にある。次節で詳述するが、ここにはフィヒテがニヒリズムに陥っていると非難したヤコービの影響がある。

フィヒテは『1801/02年』の時点では、存在と自由との対立が解決できないだけでなく、存在を自由によって、或いは自由を存在によって説明することも不可能であるという理解に達していた。この整理に従えば、経験的実在性を超越論的観念性と両立させるカントの「形式的観念論」は存在を自由によって根拠づける立場と見なすことができる(ここでの根拠づけの意味に関しては、冒頭の「地動説」を参照していただきたい)。だが観念論はニヒリズム=自己解体に向かわざるをえない、とこの時期のフィヒテは見なした。それゆえフィヒテは「知的直観」によって改めて存在と自由を統合する。これがいわゆる「五重の総合」である。

この場合、「五重の総合」というより深い見地から見れば、空間の自己解体という否定的な事態は同時に積極的意義も有している、ということになると考えられる。すなわち、「場」という構成可能性とそこから開かれる主観的構成物を「唯一の空間」と見なす立場では、「場」としての空間が「無へと消失する」という事態は何ら積極的意味を持たない。しかし、場が「無へと消失する」という事態によってむしろ、個々の場において必然的に隠されている本来の意味での空間の先行性、一性、無限性が明らかとなったのである。カントが空間論で語った「私が自らを見出す」場=「ここ」を意識と言い換えるなら、それは意識の有限性を意識が自覚する事態であるとも言える。

以下では、ニヒリズム問題を中心にフィヒテの著作の構造と動機を改めて概観し、そのあとで空間に対する「五重の総合」の立場からの統合的理解を見届けることにする。

## 1 ニヒリズム問題と『1801/02年』における「前提」の思想

『1801/02年』のうちでフィヒテが明示的に空間論に関わる箇所は第二部である。第一部においてフィヒテは絶対的存在を導入する。このことに代表される初期知識学との体系上の変化が空間論の位置づけに大きく関わることになる。そこで、簡単にこの著作の概要を示すことにしたい。要点を述べておくと、特に重要なのが「前提」の思想である。

そもそもフィヒテは『全知識学の基礎』(1794/1795)において第三根本命題を提示し、主客関係を持っているあらゆる経験的認識を自我と非我との可分的な関係に還元する。この命題においては、非我は自我によって反対定立されるが、一方で自我は自我を定立する活動性そのものである。すると非我を定立するとは、定立活動を行わないということを定立するということであり、矛盾が生じる。この矛盾を解決するのは「理性」であるとされる。そのようにして、可分的自我と可分的非我との量化作用(quantitieren)としての自我の働き、という解決が提示される。しかし、こうした理性の事実に訴えて叙述が進むため、量化作用の根源性はそれ以上遡及されることはない。

これに対して『1801/02年』の前半部は量化作用としての知を改めて問題とする。そしてこの知が思惟・自由に基づくのか、それとも存在・必然性に基づくのかが追求される。とはいえ、自由から存在を導出することも、存在から自由を導出することもできず、むしろ両項の相互透入(Durchdringen)として知が成立している。さらに、以上のことを知ることが成立しなければならない。こうして、「知的直観」が隣接した二項を合一し、かつそれら隣接項そのものにおいて二項を合一するという、いわゆる五重の総合が示される。この際に「前提」の思想が重要な役割を果たしている。

美濃部(2013)は「前提」の思想を次のように解している<sup>12</sup>。すなわち、この時期のフィヒテは、ヤコービからの批判を契機としつつ、知の本質は自己否定にあるとし、知の有限性の自覚を強調していく。第三根本命題で完結した知はむしろかえって自閉するものであり、「ニヒリズム」に至る危機として改めて考察されねばならない。しかしだからといって知がその体系的完結性を失えば、カント以来のコペルニクスの転回の意義を失うことになる。なぜなら超越論的な認識は経験的知を体系的な見地から根拠付けるものにほかならないからである。

ここで「前提」が導入された。前提とは「前voraus-措定setzen」である。それは根源的な絶対知が自らに先立つものを立てることとして自己の絶対性を否定しつつ、逆にそのことを通じて当の措定作用そのものが改めて肯定されるという事態に他ならない。

『1801/02年』の第二部以降で展開される空間論はこの解釈に概ね沿っていると本稿は考える。課題はこうである。形式(としての空間)を主観の構成物とみなせばニヒリズムに陥る。しかし空間が決して主観の能作によって構成されるものではないとすることで、空間と高次の「實在論」との区別が曖昧化している。フィヒテにとって空間論は、いかにして初期の知識学の成果を堅持しながらヤコービによる的を射た批判に耐えつつしかもヤコービとは異なった哲学を構想するのか、という問いに具体的に答えていく作業にほかならない。

フィヒテ空間を理解する上で重要なのは幾何学者の位置づけである。詳しく見ていくことにする。

<sup>12</sup> 美濃部(2013)「フィヒテとヤコービにおける知の否定性」、『フィヒテ研究』第21号、95-110頁。

## 2 量化可能性としての空間

量化作用は主客の関係であると先に述べた。いまこの事態を上述の五重の総合という立場から見れば、空間を客の側、主の側に置くなど、特定の立場からしか見ることはできない者は「囚われている」とみなされることになる。フィヒテは、空間についての誤った理解を次のように描写している。

直観は、自己内で溶解する絶対に空虚な直観から、この量化可能性へと自己を制限し、自己を形成しなければならない。知と形成の中で、量化可能性を自由の産物へと形成しなければならないのである。——[だが]決して、量化可能性はそれによってはじめて生成するわけではない。…量化可能性が発生するものとして思惟されると、…それによって量化可能性が、偶然的なものになる。…それは、私たち教養を持った人間であれば、物の表象と物とを区別する場合に誰でも行うことのできる操作と同じである…もちろん、未開の人や子供ならば、そういう操作を行うことができない…ここでは、その同じ操作が、…量化可能性自体に行われるべきである。…この操作を行わない者には、…この直観は知の客観にはならない。…こどもが個々の客観に囚われているように、彼は直観に囚われ、直観と融合してしまっている。幾何学者が空間の中にやすらい、その中に図形を描くように、彼は直観の中に他の自然現象を描く。(GA II/6, 222)

この箇所では、「教養を持った人」(以下大人)、「未開の人や子供」(以下こども)、「操作を行わない者」および「幾何学者」が、知識学者と異なった立場として考察されている。この箇所で唐突に空間内に図形を描く幾何学者が言及されるのは、後に「量化可能性は空間にはかならない」(GA II/6, 232)とされるからである。フィヒテにおける空間概念を明瞭にするために、これらの立場について立ち入って考察する。

幾何学者の立場は、量化作用をめぐるこどもと大人という対においては大人側に立ちつつ、しかしながら量化可能性をめぐる議論においては、知識学者よりもむしろこどもに近いという、複雑な立場に位置する。幾何学者は確かにこどものような単純な立場は免れているのだが、それでも「直観の中に他の自然現象を描く」者と同様に、知識学者からは囚われたものとみなされる。まずこどもの立場から検討する。

こどもは像(表象)と客観(物)との違いに気づくことが出来ない。例えば、オバケのお面を被った人とか、石の模様が顔のように並んでいるのを見ると、オバケそのものと取り違えて泣いてしまう。オバケのお面や石の模様はオバケを表している。しかし子供は、その表象作用を自覚的に見て取ることができない。これに対して大人は表象と物を「操作」の意識において区別できる。

コペルニクス的転回を遂行する哲学において、物と表象を区別するためにオバケという真の物体を独断的に仮定する必要はない。意図的にオバケを表すことによって、表されているオバケ(物)とそれを表している像とは区別できる。

## 3 表象作用におけるコペルニクス的転回

今の例には次のような逆説がある。すなわち、①表象の構成作用に没入しなければ当の表象が十全に機能しない(対象が現れることはない)が、それとともに、②この構成作用を自覚的に遂行



することができない、完全に没入したままの眼(こども)には、すべてが実在に思われる(表象性格が現れることはない)ということである。知識学はさしあたり、このような没入の構造を客観性のための必然的な条件として説明する自覚の立場である。「構成は、常にかつ必然的に自己自身を失い、自己を構成自身の中で忘却する」(GA II/6, 241)。

この構造は一般的に次の特徴を持つ。オバケはまさに主観から独立した存在である。表象作用は決してオバケそのもの(事柄として先なるもの)の背後に回り込むことはできない。すなわち、表象作用は、むしろその必然的な帰結として、表象に先立っているもの、確固としたオバケの存在を「産物」として持つ。オバケの存在が事実である(=主観から独立した経験的実在である)ことが、同じ事態について表象作用が作り出したもの(=観念、表象)として超越論的に説明されることの条件になっているのである。しかしこの関係を忘却して客観的に構成する作用に没入してしまう(「融合」する)とき、そこに素朴実在論が成立する。

幾何学も知であるがゆえに「自己を構成自身の中で忘却する」構造を持っている<sup>13</sup>。忘却は異常ではなく正常なことである。幾何学者(大人)が自由に「ここ」と対象との位置関係を変更することによって形象は変化する。そしてこのことが忘却されることで成立するのが、イデア的な「どこからも見られていない形」なのである。この操作に習熟した者の立場においては、形態・延長は客観的事実でありながら「生成」し、「偶然的なもの」(自由の所産)となるのである。

にも関わらず、さらなる問題は、転回を「客観性の絶対的根拠」である「量化可能性自体」にも行う、という点である。ここでも知識学者はコペルニクスの式的であるが、幾何学者は今度は地上を代表する者である。あらゆる図形が描かれる「場」は空間を前提しつつ忘却することにおいて成立する。この点について節を改めて検討する。

#### 4 量化可能性におけるコペルニクスの転回

幾何学者は作図において、自らの置かれている場——カントのいう形式的直観——そのものが何に基づいているかを検討することはない。カントは、幾何学的認識の可能性がアприオリに基礎づけられるのは、唯一、自分の空間論においてであると述べていた(B41)。すなわち、形式的直観は、直観の形式においてのみ可能である。カントは幾何学者が没入している場について代わりに説明したのである。この説明においては、幾何学者が没入している場は「結果」となり、直観の形式は「前提」となる。「結果」に没入してしまえば「前提」は見失われる。

ただしカントはそのような洞察を幾何学者が欠いていること自体を改めて問題にすることはなかった。言い換えれば、地上の立場に没入している者が自らの観測している「事実」を説明することはできないというコペルニクスの式的転回の逆説的真理は、カントでは対象化されない無限空間に限られて遂行されるのみであり、幾何学者が対象化する場に対して明示的には遂行されなかった。

これに対して、フィヒテは「量化可能性が、偶然的なものになる」という言葉で、幾何学者も或る種の没入によって事実を見出していることを指摘しつつ、その事実が「偶然的なもの」として哲学者によって改めて説明されるべきだと主張している。このような「偶然」という表現には、先述

<sup>13</sup> 作図について、フィヒテはGA II/6, 234ff.で詳しく述べている。そこでのフィヒテの叙述は難解であり、詳細は別稿に譲りたい。



したフィヒテがヤコービと対決する過程で得た洞察が含まれている。

しかし、そのことについて考察する前に、幾何学者がなぜ「囚われている」と評されるのかをまとめておこう。ここまでの叙述は実質的にはカントも洞察し得た事態と考えられる。すなわち、たとえ哲学者が幾何学者の前提する空間についてどのような説明を施そうとも、そうした過程に幾何学者は関心を持たないし、持ちえない。彼らは「空間の中にやすい、その中に図形を描く」。幾何学者は自分の「場」に閉じているのだが、その閉じているという認識を持たないために、表象の可能の条件としての空間の自覚に至ることがない。しかしやはり「空間」の中に安らっているのである。

このような幾何学者は、結果として、場を、堅固な空間そのものを取り違えてしまう。こどもが表象の背後に本物のオバケを見ってしまうように、幾何学者は、場を実在と見なしている。それは事実であるとともに独断でもある。無限空間を前にして、幾何学者はパスカルのように驚愕したりブルーノのように賛美することはない。しかしそれは、もう一つの観点に囚われていることによるのである。幾何学者は主観から独立した形や延長を認めないという点で素朴実在論者ではないが、しかし場と融合した空間の実在性を疑わない。先に、場を唯一の空間と見なすことによって「ニヒリズム」に陥っている「形式的観念論」に対するフィヒテの批判を見たが、これは「形式的観念論」と対を成す高次の実在論の思想であると言える。

フィヒテは幾何学者がこどもと同様の事態を免れようと思えば、「量化可能性を自由の産物に」しなければならない、とも言っている。フィヒテがすぐに注意しているように、ここでの自由の産物にするとは、量化可能性が私たちの自由によって恣意的に新たに生成するというようなことではない(それでは逆に観念論に陥る)。

空間＝量化可能性を自由の産物にする、空間が「偶然的なものになる」とは、幾何学者のその都度の作図・構成行為に先立ち、すでに存在しているものとして思惟される、先行性・無限性・一性を持っている空間を「前提」することである。空間の存在は、その存在を私たちがその背後に回って恣意的に決定できない(＝偶然)ものとして「前提」され、だからこそ絶対性をもつものとして「前提」される。このような空間の「前提」についてより詳しく考察した後で、幾何学者や子どもなど諸々の立場が初めて体系的に整理されることになる。次節でこのことを検討する。

## 5 フィヒテの空間論

これまでの考察では、空間の自己忘却的な構造をフィヒテが幾何学者に対しても適用していることを見てきた。そこから、「一切の量化作用は、すでに成立しているschon fertig量化可能性とともに始まる」(GA II/6, 229)という言葉の意味がわかる。カントが「一切の認識は、経験とともに始まる」(B1)と言いながら、認識のアプリオリな構造が経験を構成することを示したように、知識学において、量化可能性としての空間は、量化作用の前に成立しなければならないが、同時にそれはその都度の一切の意識においては、忘却されている。

知は自身を忘却する構成作用であるというカントのコペルニクスの転回に淵源する思想を、フィヒテは今一歩進めている。すなわち、知が、知の自己否定的性格をも忘却する可能性を見出していると考えられる。現実的な構成を実現するために構成可能性を前提しなければならないという知の自己否定が本来の立場であり、その忘却(高次の実在論としての幾何学、およびニヒリズムとしての形式的観念論の成立)が一次的な忘却であり、知の構成作用の忘却(素朴実在論)は

二次的な忘却である、と整理できる。

確かに空間は一切の量化作用に先立っている。しかしながら、量化作用が根源的で、他の実体によって定立されるものではないという初期知識学の立場は変わらない。量化可能性と量化作用の関係は、量化作用が自己を量化可能性によって限定されたものとして自覚すること、すなわち「直観が拘束されてある只中で自由」(GA II/6, 210)という形を取るようになる。あらゆる量化作用は、このような自覚の構造を辿って可能性の現実化として捉えられる。

量化作用は自己自身に拘束されたものとして自己を直観する。その量化作用は、現実、自由をもって行われる。量化作用は、自由に量化作用を行いつつではあるが、量化作用の被拘束性を直観することが可能になるためにも、自己自身を自己自身の条件として前提している。…[前提される量化作用]は、静止した絶対的直観、すなわち安らった光の中に静止している、永遠不滅で同一の多様性である。これは何であろうか。それは、知が定立されている場合に、永遠であり安らっている静止した空間である。(GA II/6, 230-231)

ここでフィヒテは自己直観において前提された量化作用が空間であると言っている。前提は一つの定立setzenではあるが、現実的な定立に先立つvorausものでもある。空間は「永遠」「休らっている」ものであり、無限に分割可能なものの「堅固さ」である (GA II/6, 231)。

「前提」の思想によって、フィヒテは空間が自由の後に生じる構成物であるとする観念論も、自由に先立つとする実在論も、全面的真理としては受けとらない。空間の実在性は、可分的非我として理性の決断のもとで担保されるのではない。それは今や、現実的な量化作用に前提される量化可能性という、量化作用のいわば背面にあってそれを可能にするものである。フィヒテはカントの物自体を批判するが(GA II/6, 233)、にも関わらずこの強い意味において、フィヒテは幾何学的な作図の背後にある無限空間を、構成に先立ち構成されえない構成可能性として理解することができた。

「空間の構成なしには、空間はない。もちろん、構成によって生み出されるべきなのは、空間ではなく、空間の意識である。これは、観念的關係である。空間を前提することなしには、構成はない(これは、実在的關係である)」(GA II/6, 232)。すでに成立している空間は常に現実的な「知」とともに知られるものでなければならない(「一切の量化作用は、すでに成立している量化可能性とともに始まる」)。その意味で、空間は現実的な知に先立つからといって、知から離れることはない。まただからこそ、あらゆる知にはその知の有限性の自覚の構造が刻み込まれている。そこに、知の自己否定的性格がすでに内在し発動しているとも言える。

このような関係性において空間は「線を描くこと」に対して先立つものとなる。フィヒテによれば、線は「出発点Anfangspunkt」を持つ(GA II/6, 235)。私たちは、このフィヒテのいう「線を描くこと」のうちに、私を中心とし私の眼前に繰り広げられる、現実的な「場」の成立をみとめることができるだろう。

## 結 論

本稿の議論で得られた結論は以下の通りである。第一にカントの空間論において、コペルニクスの転回が形象・延長に関して遂行された。それらの見かけの实在性は、形式としての空間の観念性と併存する。後者は無限で一なる空間である。第二に、フィヒテの空間論においては、ヤコービとの対決を経ることで、コペルニクスの転回はより複雑な仕方で行われている。ここでフィヒテは「前提」という思想のもとに空間を思惟する。空間は「無へと消失する」ことによって知を否定する契機であるとともに、そのような空間の絶対性を前提する自由な思惟の「産物」である。